

助動詞

レクチャー1

助動詞に関する基礎知識。

(1)助動詞とは。

助動詞とは will can may must should 等を指して言うことは皆さんよく知っていると思いますが、一言で助動詞の機能(働き)を説明するとすれば、

動詞の前に置いてその動詞に(話者・筆者の判断などの)意味を付け加える

と定義付けることができるでしょう。たとえば

The meeting will be successful.

という英文中の助動詞 will は、「その会合は成功する(The meeting is successful)」という文意に「ほぼ確実にそうなるだろう[予測・推量]」という話者の判断を付け足しています。

(2)助動詞の基本的な特徴。

助動詞には(基本的に全ての助動詞に共通する)6つの特徴があります。

①(平叙文では)助動詞は常に主語の直後に置く。

(ex) I must finish the task. ボクはその仕事を終えなければならない
=The task must be finished.

會上例のようにたとえ受動態になって(主語が変わって)も、助動詞はやはり(新たな)主語の直後に置かれる。

②助動詞の後ろの動詞は原形になる。

(ex) Ycu should pay[原] your debts. 借金は支払うべきです

③否定する場合は、自身の直後に not(等の否定語)を置く。

(ex) Ycu may not smoke here. ここでたばこはお吸いになれません

④疑問文では「助動詞+S+V [原]~?」の形になる。

(ex) May I come in? 入ってもよろしいですか

⑤主語が3人称単数でも助動詞には(3単現の) s はつかない。

⑥助動詞は並べて使うことはできない。

× He will can play golf. 彼はゴルフができる

○ He will be able to play golf.

レクチャー2

may の用法。

④「～する余地がある」という判断を動詞に付け加える。

④読解用には(4)以外の用法と、(6)の may を用いたイディオムの知識を整理しておくといい((4)の「許可の may」は、会話文でしか出て来ない)。

(1)「～するかもしれない」 [可能性・推量]

(ex) It may snow tomorrow. 明日は雪が降るかもしれない

may よりも「確信の度合いが弱い」推量を表すのが might です。might は、形は(mayの)過去形ですが、現在の推量・可能性を表します。

④過去を表す副詞(句・節)を伴って、might が過去の推量・可能性を表すことも、以下の英文のようにないわけではないが、受験ではあまり出てくることはない。

(ex) In his youth, wild wolves might still be found there.

彼の若い頃、そこではまだ野生の狼が見つかることもあった

実際、助動詞の過去形が(時制の一致以外で)「過去」の意味を表すのは、could と would の一部の用法のみとっていいでしょう(これらについては詳しくは後述)。

(ex) Don't lock the door. They might not have the key.

ドアに鍵をかけないで。彼らはキーを持っていないかもしれませんから

上記の例文も、過去のことを述べているわけではありません。ちなみに could は、might よりも更に「確信の度合いが弱い(低い)」推量を表します。

(2) 「～できる(かもしれない)」「～してもさしつかえない(してもよからう)」

【可能・容認】

(ex) We may count the ship as lost. 船は行方不明になったと考えてよいだろう

We may now prove that he is innocent.

これで彼は無罪だと証明できよう

It may be said (that) she is the best singer (of all).

彼女は最高の歌手と言ってもさしつかえない

(3) 「譲歩」の may。

①譲歩節で用いられる may

②逆接語とセットで用いられる may

このような may を「譲歩の may」といいますが、特に①の may は訳す必要はありません。②の場合、「～といえる(かもしれない)」「～だろう」くらいの訳でいいでしょう。

(ex) She may be rich, but she is vulgar. 彼女は金持ちかもしれないが下品だ

Times may change, but human nature stays the same.

時代は変わるだろうが人間の本性は変わらないものだ

Come what may, my love will not change.

=Whatever may happen

どんなことがあっても、僕の愛は変わらない

☞ come what may 等は、決まり文句として覚えてしまった方が早い。

(4) 「～してもよい」 【許可】

(ex) You may go home now. さあ、家に帰ってもいいですよ

You may not feed the animals. ☞このような「不許可」の may は注意が必要。詳しくは下記を

動物達に餌をやらないでください 参照せよ。

「許可の may」に関する注意事項。

「～してもよい」という「許可」の may を否定した「may not」は、「不許可(～してはいけない)」を表す。「許可」にしる「不許可」にしる、may を使うとやや高圧的な感じになるので、「不許可」なら代わりに can't を使うことが多い。また「許可」を与えるには、会話では Sure. Go ahead.

とか Yes, of course. などと言うことが多い。

(5) 「～でありますように」 【祈願】

「祈願(～でありますように)」の may の見極め方は、(May が文頭にある)疑問文の語順なのに文末尾に！があつたら(あるいは？がなかったら)、「祈願の may」とみるといいでしょう。

(ex) May all your Christmases be white! ホワイトクリスマスでありますように

(6) may を用いたイディオム。

① may well do[原形]～

1. ～するのももっともだ =have good reason to do[原形]～
=It is natural that S+V～

會「可能・容認」の may が well によって強調されたものと考えたらいい。

(ex) You may well get angry with her.

君が彼女に腹を立てるのももっともだ

=You have good reason to get angry with her.

=It is natural that you should get angry with her.

2. たぶん～だろう =S is likely to do[原形]～

會「推量」の may が well によって強調されたものと考えたらいい。

(ex) It may well be true. それはたぶん本当だろう

② may[might] as well do[原形]～ (as do[原形]…):(…するくらいなら)～した方がいい(ました)

會 might を使うと現実味が薄れ、比喩的(仮定的)な意味合いが強まる。

(ex) You may as well come with me. 私と一緒に来た方がいい

You may as well do it now as (do it) later, since you must do it anyway.

後でするよりもそれは今やった方がいいよ。どうせそれをしなくてはならないのだから。

You might as well throw your money away as lend it to him.

彼に金を貸すくらいなら、捨てた方がまだよ

③so that S may[will/ can] √[原形]~:Sが~するために(できるように)
=in order that S may[will/ can] √[原形]~

(ex) Work hard so that you may succeed.
成功できるように一生懸命働きなさい

レクチャー3

can の用法。

④「現実になりうる」という判断を動詞に付け加える。

(1)「~できる」 [能力] =be able to

(ex) Can you speak English? あなたは英語が話せますか

助動詞は 2つ並べて用いることができないので、「~できるだろう」と、未来の内容を will と共に表したい時は、必ず be able to を用います。

(ex) He will be able to[×can] come tomorrow. 彼は明日は来れるだろう

(2)「~してもよい」 [許可]

(ex) You can use this car any time. いつでもこの車を使ってもいいですよ
Can I use your CD player? あなたのCDを使ってもいいですか

(3)「~し得る/であり得る」 [可能性・推量]

(ex) Can she say that? 彼女がそんなことを言う(可能性がある)だろうか

(4)cannot で「~する(である)はずがない」 [否定的断定]

(ex) The rumour cannot be true. その噂が本当であるはずがない

これは「可能性」の can の否定と考えたらいいでしょう。

(5)can を用いたイディオム。

①cannot do[原形]～ too… : 「いくら～しても…しすぎることはない」
=cannot do[原形]～ enough

このイディオムは、解釈問題などで意味を理解するのに苦労することがあります。
これを解決する裏技は、このイディオムは「命令文」あるいは「should+do[原形]～」で書き換えられる、ということです。

(ex) You cannot be too careful in choosing your friends.
=Be (very) careful in choosing your friends.
友人を選ぶ際には、注意してしすぎるということはない

You cannot begin learning a foreign language too early.
=Begin learning a foreign language early.
外国語の学習を始めるのに（年齢が）早いに越したことはない

I love my work; you can't give me too much.
=give me much.

僕は仕事が好きだ。いくらあってもいい

I cannot thank you enough. お礼の申し上げようがありません
=I should thank you so much.

②cannot help doing～ : ①「～せずにはいられない」
=cannot but do[原形]～ ②「～せざるを得ない」

(ex) I could not help telling her the truth of the matter.
=I could not but tell her the truth of the matter.
僕は彼女に事の真相を話さずにはいられなかった

She couldn't help but be a little vague.
彼女が少しあいまいな態度だったのはやむをえなかった

レクチャー4

could の用法。

could は can の過去形ですが、実際、文字通り「過去」の意味を表すのは、(1)の用法のみ(oculd have+p.p.は除く)です。(2)は仮定法。(3)~(6)は can よりも「確信の度合い」が弱まったもので、いずれも内容的には「現在」の内容を表します。

(1)「~できた」 【能力・可能】

(ex) He could climb trees easily when he was young.

彼は若いころは木に楽々と登ることができた

《 重要! could と was[were] able to の違い 》

1. could は「~する能力があった」だけであるのに対し、 was[were] able to はこの意味に加えて「~する能力があり、かつ実際に行なった」ことも表すことができる。

(ex) My father could[was able to] swim well when he was young.

父は若いころ泳ぎがうまかった

Ⓢ上例は、そういう能力があったことを示している(永続的能力)。仮定法の could と混しやすいため、上例のような過去を示す語句なしで「~する能力があった」という意味の could が使われることはまずない。(もちろん前後関係から過去の内容を指すことが明らかである場合には、そのような語句なしに「過去」を表す could が使われることはありうる)

(ex) My father was able to[×could] swim across the river.

父はその川を泳いで渡ることができた(実際に渡った)

Ⓢ上例の用に、過去の一回の行為として「~することができた(実際に行った)」という場合には was[were] able to や managed to を用いる。

2. 否定文では could も was[were] able to と同じように用いることができる。

(ex) I could not[=was not able to] answer the question.

私はその質問に答えることができなかった

3. 受身では could が用いられ was[were] able to be+p.p.~という形は使わない

(ex) The door **could not** [~~x~~ was not able to] be opened.

そのドアは開かなかった

(2) 「～しようと思えばできる」 【仮定の能力】

この **could** は、仮定法(過去)の **if** 節が省略されたものと考えてもいいでしょう。現実にはありえない内容と共に用います。

(ex) I'm so hungry that I **could** eat a horse.

あんまりおなかがすいて、馬1頭でも食べられそうだ

(3) 「～でありうる」 【可能性・推量】

これも本来は仮定法(過去)の用法です。会話ではこの用法が多いといえます。can にもこの用法がありますが、**can(may・might)** より、**could** を用いた方が「確信の度合い」が弱くなります。「ひょっとしたら～だ」くらいの意味になるのです。

(ex) "Is it true that he's bought a Rolls Royce?" "It **could** be."

彼がロールスロイスを買ったって、本当かね かもね

(4) 疑問文で「一体全体どうして～か」 【強い疑い・否定的な推量(可能性)】

これも本来は仮定法(過去)の用法で、**can** を使う場合よりも、「ありえない」という気持ちが強くなります。

(ex) How in the world **could** you do that?

なんだってそんなことをするんだ

ちなみに「**could have+過去分詞**」で、過去のことについての推量を表します。**could not have+p.p.～** は、**cannot have+p.p.～** とあまり内容的には変わりません。

(ex) Who **could have borne** to see such a scene?

だれがそんな光景を直視できただろうか

Ⓢ **bear to do** [原形]～で「～するのに耐える」。bear の活用は bear - bore - born(e)。

You **could not have seen** Bill because he is still abroad.

君はビルに会ったはずがないよ。彼はまだ外国にいるのだから

(5) Could I do[願]~? で「~してもよいでしょうか」 【許可】

(Can I ~? よりも)丁寧な「許可」を求める表現になります。

(ex) **Could I sit here a minute?** ここにちょっと座ってもよいでしょうか

上例は I wonder if I could sit here a minute. と表現できます。応答には Yes, you can. などを用い、Yes, you could. は不可です。

(6) Could you do[願]~? で「~していただけませんか」 【依頼・要請】

(Can you ~? よりも)丁寧な「依頼・要請」を表す表現になります。

(ex) **Could you repeat that?** もう一度おっしゃってくださいませんか

(7) 「could have+p.p. ~」。

① 仮定法過去完了の用法。 ☞ 過去の事実と反する仮定を述べる。

(ex) If you had asked me at that time, I **could have told** you what happened.

あの時君が私に聞いてくれたら、何が起きたのか話してあげられたのに

② 現在・当時から見た過去の推量「~だった(の)かもしれない」。

(ex) The answer **could have been** right. 答は正しかったかもしれない

③ 未来完了(の推量)「(~までに)…してしまっているかもしれない」。

⇨ will have p.p. ~

(ex) By this time next week you **could have forgotten** all about this.

来週の今頃にはもうこんなことはすっかり忘れてしまっているかもしれませんよ

must の用法。

📌 「絶対～だからね」という判断を動詞に付け加える。

(1) 「～しなければならない」 [義務]

(ex) You **must** come here by noon. 昼までには君はここにこなくてはならない
 You **must** come here. ぜひ当方へ来てください

「～しなければならない」という must は have to で言い換えることができる。

→ You **have to** come here by noon.

昼までには君はここにこなくてはならない

また、例文のように、文脈によっては You must が「ぜひ～してください」という、「勧誘」の意味になることもあります。

それから、名詞の must も「不可欠のもの」という意味で、会話ではよく用いられます。

(ex) This law is a **must**. この法律は絶対必要なものだ
 When you go to a wedding, a hat is a **must**.
 結婚式に参列するときには帽子を忘れてはならない

(2) 「～する（である）に違いない」 [肯定的断定]

(ex) You **must** be tired. あなたは疲れているに違いない
 You **must** know where she is. She is a friend of yours.
 君は彼女の居所を知っているはずだ。友だちなんだから

must がこのような意味になるのは、原則として後ろに be動詞に代表されるような「状態動詞」を取った場合です。特に must be は have to be で言い換えられます。

→ You **have to be** tired. あなたは疲れているに違いない

(3) must not do[原形]～ 「～してはならない」 [禁止]

(ex) You **must not** tell a lie. ウソをついてはならない

「～しなければならない」「～する(である)に違いない」という意味の **must** は **have to** で言い換えることができますが、**don't have to** は「～しなくてもいい (=need not)」という意味で、**must not** とは意味が異なります。

(ex) Do you **have to** go to school today?

君は今日学校に行かなくてはならないのかい

Tom **has to** be kidding. トムは冗談を言っているに違いない

You **don't have to** come here. 君はここにこなくていい

=You **need not** come here.

レクチャー6

should[=ought to] の用法。

會「当然のことだ」という判断を動詞に付け加える。

(1) 「～すべきだ」 [義務]

(ex) You **should[=ought to]** look after your little brother.

君は弟の世話をすべきだ

(2) 「～するはずだ」 [(現在時における)可能性・推量]

(ex) They **should[=ought to]** arrive by ten o'clock.

彼らは10時までには到着するはずだ

《「可能性・推量」の **may[might]**, **can**, **should** について》

以下の問題、どれが正解になるでしょうか。may[might], can, should はどれも「推量」を表すことがあります。迷ってしまいますね。

Q: You () miss the train if you don't hurry up.

- ① can ② may ③ should

結論から言うと may が正解で can, should は不正解です。

can は「可能性・推量」の意味で使われることがありますが can は「(事件

状況などが外的な要因によって～する[ある]ことが「理論上ありうる」ことを表し、「現実の可能性」については may, might, could を用います(could → might → may の順に可能性(確率)が高まる。may で約50%程度)。つまり

(ex) According to the radio, it could[may, might] rain this evening.
ラジオによると今晚雨になるかもしれない

といったような文の場合、この文の could, may, might の代わりに can は使えません(従って本問で can は不正解になる)。

次に should が「可能性・推量」を表す場合、話し手の期待に沿う可能性について言う場合に用います(従って本問で should は不正解になる)。

(ex) He is leaving home now. He should reach the office in an hour.
彼は今家を出ます。1時間で会社に着くでしょう
According to this map, this should be our way.
この地図によるとこれが我々の進路のはずだ
I've mended it, so it should be all right now.
繕(つくろ)ったのだからもう大丈夫です

may の場合、主観的な判断を表し、「現実の可能性」「理論上の可能性 (=can)」どちらの意味にも使えます。

ただし「可能性・推量」の may は疑問文では使えません。

× May he still be at the station?

彼はひょっとしてまだ駅にいるでしょうか

○ Do you think he still is at the station?

△ Might he still be at the station?

☞ might は疑問文でも使えるが、一般的な言い方ではない。

(3)should の注意すべき3用法。

- ①「要求」「提案」「命令」「決定」を表す動詞や形容詞(要するに「～せよ」「～した方がいい」といった、相手に対する願望や要求を表すような意味を持つもの)の後の that 節中の動詞は、「(should)+do[願]」にする。

☞ should は省略できるが、その場合、後の動詞は「原形」のままにしておく

なくてはならない。

1. S + vt + that S + (should) + do【原形】～.



○

※下線を引いた語は頻出。

- ①要求 (demand「要求する」, require「要求する」, ask「要求する」, request「要求する」
insist「要求する、言い張る」, urge「要求する、言い張る」等)
◎urgeには「～するよう(熱心に)勧める」という、「提案」の意味もあり。
- ②提案 (suggest「提案する」, propose「提案する」, advise「忠告する」, recommend「勧める」等)
- ③命令 (command「命令する」, order「命令する」等)
- ④決定 (decide「決定する、結論を下す」等)

(ex) He **insisted** that I (should) pay the bill.

彼は私とその勘定を払うよう言い張った

2. 形容詞 + that S + [should] + do【原形】～.



※下線を引いた語は頻出。

necessary「必要な」, urgent「緊急に必要な」, important「重要な」, essential「不可欠な」
desirable「望ましい」, crucial「極めて重要な」, vital「極めて重要な」, advisable「望ましい」
imperative「絶対必要な」

繰り返しになりますが、要するにこのタイプの形容詞は、「何かが必要ならなければならない」とか「重要である」といった(相手に対する要求・勧告・願望を含意する)意味のものです。

(ex) It is **necessary** that you (should) pack and leave at once.

君はすぐに荷作りして出かける必要がある(→出かけた方がいい)

② 「感情・判断の should」。

1. 疑問詞の後ろに置いて、驚きや意外な気持ちを表わす。

このようなshould は「**一体(全体)**」などと訳します。

(ex) How **should** I know? 一体どうして私が知っているというの

Why **should** they have died so young?

一体何故彼らはそんなに若くして死んだのか

2.It is+形容詞(分詞)・名詞+ that S+V～ の構文中で、

I (「良い」「悪い」といった)話者の主観的判断を表したい

☞「形容詞(分詞)・名詞」＝「話者の(良い・悪いといった)主観的判断を表すもの」となる。

II (「驚き」「憐れみ」といった)話者の感情を強調したい

☞「形容詞(分詞)・名詞」＝「話者の感情を表すもの」となる。

場合、**that節内で「should+do[彫]」が使われる**(このshouldは①と違い、省略されることはない)。

主観的判断を表す should は、話し手が頭の中で考えて、それを(真実はどうあれ)主観的に観的に述べて(判断して)いることを表します。

(ex) It is a good thing that he **should study** harder than before.

彼が前よりよく勉強することはいいことだ

It is lucky that the weather **should be** so nice.

天気がこんながいい[よかった]なんてついている

事実として(主観を込めずに)客観的に述べるのであれば直説法を用い、以下のように should は使いません。

(ex) It is lucky that the weather **is** so nice.

天気がこんながいい[よかった]なんてついている

話者の感情を強調する should の例が以下です。

(ex) It is surprising that you **should know** so much her.

君が彼女についてそんなによく知っているとは驚きだ

It is a pity that she **should have failed** the examination.

彼が試験に落ちたとは気の毒に

特に感情を強調しないなら直説法を用い、以下のように should は使いません。

(ex) It is a pity that he **failed** the driving examination.

彼が試験に落ちたのは残念なことだ

③for fear S+should[would/might]+do[原形]～.

「～しないように(するといけないので)」

(ex) I took my umbrella for fear it should rain.

雨が降るといけないのでかさを持っていった

Walk quietly for fear you should wake her.

彼女を起こさないように静かに歩きなさい

《 もう一步深く!! 動詞の原形の持つイメージ 》

動詞の原形の『核』のイメージ、それは「まだ行われていない」です。例文で見てください。

(ex) Tell me the truth. 真実を話してください

I want you to study harder.

君にもっと一生懸命勉強してもらいたい

上の英文の Tell, study は(話者がしてほしいと思っていることであり)、確かにまだ行われていないこと(行為)ですね。

これが分かると、どうして「要求・提案・命令・決定」を表す動詞等の後の that節内で(should が省略されても)動詞の原形が来るのかその理由が理解できません。that節内の内容は、話者が「～してほしい」と思っているまだ実際にはまだ行われていないこと。だから動詞の原形で表すのです。これは「命令文が命令する内容 = (話者がしてほしいと思っている)まだ行われていない内容 ⇒ 動詞の原形で表す」のと全く同じなのです。

レクチャー7

need の用法。

need には、助動詞の needと(一般)動詞のneed があり、それぞれの用法、その違いが問われやすいのです。詳しく見ていくことにしましょう。

(1) 「助動詞のneed」が否定文や疑問文でしか使えないのに対し、「(一般)動詞のneed」は肯定文・否定文・疑問文全てで使える。

したがって「君はもっと一生懸命勉強する必要がある」という日本文を

○ You need to study harder.

と、(一般)動詞の need を用いて表現することはできても、

× You need study harder.

と、助動詞の need を用いて表現することはできません。

否定文や疑問文では、助動詞のneed、(一般)動詞のneed 両方使えますが、それぞれのとる形(構造)が問題でよく問われます。

たとえば「君は来る必要がない」という言い方は、助動詞、一般動詞それぞれの need を用いて以下のように書くことができます。

① You need not come. [助動詞]

② You don't need to come. [(一般)動詞]

【角解説】 助動詞の否定は、助動詞の後ろにnotをつけなければならない。つまり助動詞のneedは「need not do[原形]～」が否定形になる。(一般)動詞の場合直前にdon't[doesn't/didn't]をつけることによって否定文を作るので、(一般)動詞のneedの場合、don't等を直前につけなければならない。更に「～する必要がある」という場合には、「need to do[原形]～」と、to不定詞が直後にくる。だから全体は「don't need to do[原形]～」という形になる。以下のような選択肢に引っ掛からないように注意せよ!

× don't need come

× need not to come

× need to not come

(2) 「一般動詞のneed」は目的語に不定詞と動名詞両方とることができるが、それぞれで意味が違ってくる。

need { to do[原形]～: 「～する必要がある」 [能動]
doing～: 「～される必要がある」 [受身]

(ex) He will need looking after. 彼の面倒をみてやる必要がある

The house needs repairing. 家は修繕が必要だ

=The house needs to be repaired.

=We need to repair the house.

will の用法。

④ 「ほぼ確実に(100%)そうなるだろう」という判断(予測)を動詞に付け加える。

(1) 「～だろう」 [(現時点での)予測・推量]

(ex) It **will** rain tomorrow. 明日は雨が降るだろう

(2) 「～するつもりだ」 [(現時点での)強い意志・固執]

(ex) I **will** do my best. 私はベストを尽くすつもりです

The door **won't**[=**will not**] open. そのドアはどうしても開かない

上例のように **won't**[=**will not**] が強い拒絶の意思を表すことがあり、「物」も主語にとることがあります。

(3) 「～するものだ」 [現在の習慣(習性)・一般的傾向]

「どうしても～したがるものだ」

(ex) Accidents **will** happen. 事故は起こるものだ

Boys **will** be boys. 子供は子供だ → 男の子の腕白は仕方がない

Oil **will** float on water. 油は水に浮く

上例は油の習性を強調した英文といえます。普通、自然法則で繰り返される動きには「現在時制」を用います。

(ex) The sun rises[×**will rise**] in the east. 太陽は東から昇る

(4) **Will you do**[原形]～? 「～ませんか」 [勧誘・依頼]

=**Won't you do**[原形]～? 「～してください」

(ex) **Will you** shut the window? 窓を閉めてくれますか

Bring me a glass of water, **will you**?

水をいっぱい持ってきてくれるかい

Won't you have some more coffee? コーヒーをもう少しいかがですか

④ Won't you~?の方がより丁寧な表現。Will you do~?が相手の意志を問う(「~しますか」)場合もあるが、その時は文尾を上げて発音する(逆に [勧誘・依頼] の場合には文尾を下げて発音する)。

レクチャー9

would の用法。

would は will の過去形ですが、実際 would が「過去」の意味を表すのは、下の(1)~(3)の用法においてのみです。(4)、(5)は「現在」の仮定や推量を表します。

(1) 「~するだろう」「~しよう」 [時制の一致によって生じる would]

(ex) I **think** that she **will** come to the party.

僕は、彼女がそのパーティーに来るだろうと思う

→ I **thought** that she **would** come to the party.

僕は、彼女がそのパーティーに来るだろうと思った

これは時制の一致によって will が would に変化したもので、和訳の際には「~だろう」と訳してかまいません。

(2) 「(どうしても) ~しようとした」 [過去の強い意志]

(ex) The door **would** not open. そのドアはどうしても開かなかった

これは「現在の意志を表す will」が、過去時制で用いられたものです。will 同様、この would は、上例のように「物」を主語にとることもあります。

(3) 「(昔) よく~したものだ」 [過去の不規則的習慣]

(ex) I **would** often go fishing in the lake.

僕はよく湖に釣りに行ったものだ

これは「現在の習慣(習性)を表す will(~するものだ)」が、過去時制で用いられたものといえます。

《 重要! 「used to do[彫]～」と「would do[彫]～」の違い 》

「過去の習慣(昔よく～したものだ)」を表すのは would だけではありません。used to do[彫]～ も、似たような意味があります。受験では両者の違いがよく狙われます。以下でその違いを整理してみましょう。

- ① 「used to do[彫]～」は過去の"規則的習慣"を表し、「would do[彫]～」は過去の"不規則的習慣"を表す。

(ex) I **used to** get up early when I was young.

僕は若いころは早起きだったものだ

He **used to** visit us on Sundays.

彼は(毎週)日曜日には私どものところを訪れたものです

上例は、規則的習慣ですから used to がふさわしいといえます。

- ② would は「状態動詞」と一緒に用いない(「動作動詞」と共に用いる)。

×People **would** believe that the earth was flat.

人々は地球は平らだと信じていたものだった

上例で、believe は状態動詞なので、would を「過去の習慣」の意味で使うことは出来ません。

しかし、used to は、「状態動詞」「動作動詞」どちらとも使うことができるので上記の例文は

○People **used to** believe that the earth was flat.

と書き直せば正解になります。

なお、used to は「動作動詞」「状態動詞」を取った場合でそれぞれ以下のような意味を表します。

1.used to+動作動詞:(昔)よく～したものだ [過去の習慣]

2.used to+状態動詞:(昔)～だった [過去の状態]

特に used to be は was[were]と意味が同じと置いていいでしょう。

(ex) He is not what he **used to be**.

彼は昔の彼ではない

=He is not what he **was**.

③現在と対比された文脈では **used to** を用いる (**would** は使えない)。
つまり **used to** には「今は違うのだが…」というニュアンスが込められる
のです。

(ex) I **used to** smoke when I was young, but now I don't.
若いころはタバコを吸ったものだ。しかし今は吸わない

(4)「～するだろうに」 【仮定法の **would**】

(ex) She **would** help you if you were here.
ここにいたら彼女が君を手伝ってくれるだろうに

(5)仮定法の **would** が弱まって意味が転じた **would**。

①「非常に丁寧な依頼」を表す。

(ex) **Would** you (please) carry this baggage to the counter?
この荷物をカウンターまで持って行ってもらえますか

②「(1人称で)好き嫌い」を表す。

1. **would like to do**～:～したい
2. **Would like A to do**～: Aに～してほしい

(ex) **Would you like me to** shut the window?
私に窓を閉めてほしいですか → 私が窓を閉めましょうか

3. **would rather do**[原]～ (than do[原]…) : (…するより)むしろ～したい
= **prefer to do** (rather than to do…)

(ex) I **would rather** stay at home than go shopping in this rain.
この雨では買物に行くよりはむしろ家にいた方がいい

③「推測・婉曲」を表す。「～だろう」。

(ex) It **would** be about a mile from here to town.
ここから街まで1マイルくらいでしょう
How old **would** she be? 彼女はいったい幾つでしょうか

I think this **would** be cheap at 1,000 yen.

1000円ならこれは安いと思います

💡「実際には知らないが千円だったら…」という意味がある。

レクチャー10

その他の助動詞。

(1) had better+do[原形]～:～した方がいい

had better は「警告」「脅し」を含意することもあるので、通例目下の者に対して用いる表現と言えます。

(ex) You **had better** go there. 君はそこに行った方がいい

(2) would rather[sooner] do[原形]～ (than do[原形]…): (…するより)むしろ～したい

(ex) I **would rather** sleep **than** watch TV. テレビを見るよりむしろ寝たい

(3) How dare S+V～?: よくも～するものだな

これは相手に対する非難を表す表現です。

(ex) **How dare** you say such a thing to me?

私に向かってよくもそんなことが言えるものだな

💡dareもneedと同じように、疑問文・否定文でしか使わない助動詞だが、受験で出るのはほとんど上記の表現。

(4) Shall I do[原形]～?: 私が～しましょうか

(ex) **Shall** I open the window? 私が窓を開けましょうか

(5) Shall we do[原形]～?: (一緒に)～しませんか

=Let's do[原形]～!

(ex) **Shall** we dance? ダンスを踊りませんか

(6) 「強調」の助動詞 do

「強調の do」は、「do+(一般)動詞の原形」の形で用い、(直後の)動詞を強調し

ます。「実際」「本当に」「ぜひ」等と訳すことが多いです。

(ex) "Why didn't you come yesterday?" 昨日はどうして来なかったんだ
"But I **did** come." いや行ったとも

レクチャー11

「not」の位置に注意すべき助動詞3つ。

not の位置に注意すべき助動詞は、以下の3つですが、覚え方は、

「(否定の)not は不定詞(to+do[原形]～ / do[原形]～)の直前に置く」

と覚えるとカンタンです。

(1) 「ought to do[原形]～」の否定形は「ought not to do[原形]～」。

(ex) You ought not to say such a thing in public.

[×cught to not]

人前でそんなことを言うべきではない

(2) 「had better do[原形]～」の否定形は「had better not do[原形]～」。

(ex) You had better not go out by yourself.

[×had not better]

一人で外出しないほうがいい

(3) 「would rather do[原形]～:むしろ～したい」の否定形は「would rather not do[原形]～」。

(ex) I would rather not say anything about politics.

[×wuld not rather]

政治についてはどちらかというと言いたくない

「助動詞+have+p.p.～」。

助動詞を用いて過去の内容を述べようとする際に、助動詞の後ろに have+p.p.～ が付きます。助動詞の後ろの have+p.p.～ は「過去の目印」と覚えておくといいいでしょう。

以下にそれぞれの助動詞が、have+p.p.～ を取った場合の意味をまとめてみましょう(特に should have+p.p.～、need not have+p.p.～ については()の言外の意味を理解することも大切です)。

(1) must	} + have+p.p.～	(1)～した [だった] に違いない
(2) may[might]		(2)～した [だった] かも知れない
(3) can't		(3)～した [だった] はずがない
(4) should ought to had better		(4)～すべきだった(のに実際にはしなかった)
(5) need not		(5)～する必要はなかった(のに実際にはした)

なお、should[ought to]+have+p.p.には「(当然)～したはずだ」「(当然)～してしまっているはずだ」という意味もあり、こちらも重要です。

(ex) You **must have broken** the window. お前が窓を割ったに違いない

I **may not have told** you to do that, but it's not important.

君にそれをするよう言っていなかったかも知れないが、でもそんなことは重要じゃない

You **can't have met** him in the park yesterday, because he has been in Paris since last week.

君が昨日公園で彼に会ったはずがない。なぜなら彼は先週からずっとパリにいたからだ

She **must have felt** lonely then, I **ought to have been** kinder to her.

あの時彼女は寂しかったに違いない。僕はもっと彼女に親切にすべきだった

You **needn't have worried** about me at all.

あなたは僕のことを心配する必要など全くなかったのですよ

I **should have telephoned** you last Monday, but I was too busy.

先週の月曜に君に電話すべきだった（が実際にはできなかった）。でも僕はあまりに忙しかったんだ

Their train **should have arrived** at Manchester by now.

彼らの乗った列車は今頃はもうマンチェスターに着いているに違いない（着いているはずだ）

He **should have locked** the door. 彼はドアにカギを（当然）かけたはずだ

會上例は「彼はドアにカギをけるべきだったのに（かけなかった）」の意味にもとれる。このあいまいさもあってこの **should have+p.p.** は **may, could, must** ほど用いられない。

態

レクチャー1

受動態の訳と作り方。

受動態とは、受け身のことで「～(さ)れる」「(さ)れている」と訳します。
受動態の作り方の基本は、以下の通りです。

- ①元の文の目的語を主語にして、
- ②動詞を「be動詞+過去分詞」に変え、
- ③元の文の主語は「～によって」という前置詞の **by** をつけて文尾に移動する。

(注1)：元の文の目的語が受動態における主語になるということは、元々目的語をもっている文しか受動態を作ることはできないということ。

そして受動態の英文の「be動詞+p.p.」の後ろは、目的語が一つ欠けた構造になる。

(注2)：ただし、いくら目的語があっても、以下のような場合は受動態は作れない。

1.主語から目的語への積極的な働き掛けが弱い動詞の場合 (resemble「似ている」, belong to「所属している」)

2.目的語がoneselfやeach otherの場合

要するに受動態は、「何らかの意味で、主語が他のものから動作の作用・影響・被害などを受けるような場合」に用いられるのが基本なのだ。

(注3)：元の文の目的語が代名詞だった場合、それを主語にする際には、主格に直す。 (ex)me→I

(注4)：元の文の主語が代名詞だった場合、byをつける際、目的格に直す。 (ex)He→by him

(注5)：助動詞を含む文の受動態は「S+助動詞+be p.p.～」の形になる。その疑問文形は「助動詞+S+be p.p.～?」となる。

(ex) They will finish the work.

→The work will be finished (by them). ☞助動詞は「態」が変わっても

→Will the work be finished (by them)? 常に主語の直後に置かれる。

(注6)：完了形の受動態は「have[has/had]+been p.p.～」となる。

それぞれの文型(第三文型、第四文型、第五文型、その他)が受動態になる場合の公式を、記号と簡単な例文で表してみましよう。

(1)第三文型

☞Vtとは、「他動詞」のこと。

p.p.とは「過去分詞」のこと。

S+Vt+O ⇨ O+be p.p.+by S.

(ex) She loves her husband.

→ Her husband is loved by her.

上記の英文を受動態にした場合、以下ようになります(We を by us とはしません)。

→ Freedom of individual should be respected.

その他に、以下のような場合も by ~ は省略されます。

- ①行為者が不明瞭な場合(someone, anyone, no one 等)。
- ②行為者が明白な場合や行為者を言いたくないような場合。

レクチャー2

by 以外の前置詞を用いる受動態。

以下に挙げたものについては、一種のイディオムとして覚えてしまいましょう。

- (1) A is known
- to B(人) : AはBに知られている
◎見極めのポイントは「A≠B」となる点。
 - for B(軸) : AはBで有名だ =be famous[noted] for A
◎見極めのポイントは「B=理由を表す語句」となる点。
 - as B(人・物) : AはBとして知られている
◎見極めのポイントは「A=B」となる点

(ex) She is known to the local community as an eccentric.

彼女は、その土地の人々には変人を通っている

◎to は「到達点に向かった方向」を表す前置詞。上例の場合、「彼女=変人」としての情報が the local community にまで達しているということ。

as は = 、つまり「イコール記号」と考えるとよい。上例でも、「She = an eccentric」の関係。

New York is best known for its tall buildings.

ニューヨークは、高層の建物があることで最もよく知られている

◎for は「~の故に」という理由の前置詞。

He was known as a good politician and gentleman.

彼は、良い政治家としてとしてまた紳士として知られていた
as は = 、つまり「イコール記号」と考えるとよい。上例でも、
「He = a good politician」の関係。

be known~ については、以下の表現が要注意です。

(ex) A man is known by the company he keeps.

人は自分が持っている仲間で（もって）判断される
(付き合っている仲間を見ればその人がわかる)

上例の英文中の by は「~でもって」という"判断の基準"を表す by であって、
受動態の、つまり「~によって」という"受身"の by ではありません。

be known の後ろに(受け身の)by があえて使われるのは、動作主が「知ろ
うとして知る」ことを示す文脈で好まれる。

(2)be interested **in** A : Aに興味がある

(3)be surprised[astonished] **at** A : Aに驚く

(4)be satisfied **with** A : Aに満足する

(ex) I am satisfied with the new car. 私は新車に満足している

(5)be covered **with** A : Aで覆われている

(ex) The mountain top was covered with snow.

山頂は雪で覆われていた

(6)be crowded **with** A : Aで混み合っている

(ex) The beach was crowded with thousands of people.

何千人もの人たちがその浜に押しかけた

(7)be engaged **in** A : Aに従事している

(ex) He is engaged in foreign trade. 彼は外国貿易に従事している

(8)be occupied **with[in]** A : Aで忙しい、Aでいっぱいだ

(ex) He is occupied with the latest report.

彼は最新の報告書解読に没頭している

My mind was occupied with my son.

私の頭は息子のことでいっぱいだった

(9)be caught **in** A : Aに遭(あ)う、見舞われる

(ex) I was caught in a shower on my way home.

帰り道でにわか雨に遭った

(10) be absorbed in A : Aに夢中になっている(である)

(ex) He was absorbed in the book. 彼はその本に夢中だった

(11) be acquainted with A : Aと知り合いである

(ex) I am acquainted with the chairman of the club.

私はそのクラブの会長と知り合いです

(12) be killed in A : Aで死ぬ

(ex) He was killed in the car accident.

彼はその自動車事故で亡くなった

(13) be filled with A : Aで満たされている

(ex) The glass was filled with water. そのグラスは水で満たされていた

(14) be convinced of A : Aを確信している

(ex) He is convinced of his innocence.

=He is convinced that he is innocent.

彼は自分が無実であると確信している

④ be+過去分詞の後の前置詞について、それぞれの前置詞のもつイメージがわかっていると「なぜそれが使われているのか」ということを理解しやすい。

たとえば at は「点」がそのイメージ。「(時の)点」は「瞬間」に通じる。つまり瞬間・一時的に感じる感情に対しては at が相性がいいのだ。だから be surprised(驚く)などは at が用いられる。

※もちろん「~によって驚かされた」と受け身的な意味合いが強い場合には be surprised by ~ という言い方もあり得る。

(ex) She was pleasantly surprised by her parents' unexpected visit.

両親が思いがけず訪ねてきて彼女は驚喜した

with は「~と一緒にいる」がそのイメージ。そこから「満足・よろこび」といった比較的長く残る(留まる)感情と相性がいいのだ。be pleased, be satisfied などがそれにあたる。be disappointed が at, with どちらも後ろにおけるのは、「がっかりした」という感情は「瞬間的」な場合もあれば「長く残る(留まる)」こともあるからと見るといい。もちろん be occupied, be crowded, be covered, be filled などと共に用いられる with は「もの・こと」が「共にある」という

こと。in は「中に入っている(いて)」「中に入る」という場合に用いられる。

レクチャー3

群動詞(句動詞)の受動態。

(1)群動詞(句動詞)とは

群動詞(句動詞)とは、「自動詞+前置詞(+目的語)」や「他動詞+副詞(+目的語)」「他動詞+名詞+前置詞(+目的語)」等の形で、それ全体で1つの動詞と同じ働きをするもののことを言います。

(2)群動詞(句動詞)の受動態。

群動詞(句動詞)を受動態にする場合、その群動詞全体を1つの他動詞とみなし、ワンセットで移動させます。

(ex) He **laughed at** me. 彼は私を笑った

たとえば上の英文の場合、laugh at ワンセットで「～を笑う」という意味を表します。したがって laugh at ワンセットで1つの「他動詞」と判断し、受動態を作る際もワンセットで移動させるのです(つまりバラバラにしない)。つまり以下のような文になります。

→ I was **laughed at** by him. 私は彼に笑われた

at と by という前置詞が連続して、一見違和感があるように日本人には感じますが、これは問題ないのです。

以下に、それ全体をひとつの他動詞とみなすような群動詞の具体例を見てみましょう。

(3)自動詞+前置詞

(ex) laugh at A :「Aを笑う」 look into A:「Aを調べる」
send for A :「Aを呼びにやる」 deal with A:「Aを処理する、扱う」
bring about A:「Aをもたらす」 keep on A :「Aを身につける」

(ex) The parents **sent for** the doctor.

両親は医者を呼びにやった

→ The doctor was sent for by the parents.

(4)他動詞＋名詞＋前置詞

(ex) take care of A :「Aの世話をする」 do away with A :「Aを取りのぞく」
look forward to A :「Aを楽しみにして待つ」 make use of A :「Aを利用する」
lose sight of A :「Aを見失う」 find fault with A :「Aを非難する」
pay attention to A :「Aに注意する」 take advantage of A :「Aを利用する」

(ex) I must take care of my dog.

私は犬の世話をしなければならない

→ My dog must be taken care of by me.

「他動詞＋名詞＋前置詞」型の群動詞では、他動詞の後の(形容詞・冠詞がついた)名詞を主語にして受動態を作れるものもあります。以下に例を挙げてみましょう

(ex) We took full advantage of the chance.

我々はそのチャンスを十分に利用した

上記の英文は、まず of の目的語である the chance を主語にして受動態を作れます。

→ The chance was taken full advantage of.

そのチャンスは十分に利用された

更に、took の目的語である、full advantage を主語にした受動態も作れるのです。

→ Full advantage was taken of the chance.

會上例の full advantage のように、このタイプの受動態の場合、(主語になる)名詞の前に形容詞がついていることが大半。逆に言えば、take advantage of の advantage が単独で主語になる

Advantage was taken of the chance.

というような受動態は普通ではない。

もう1つ例を挙げてみましょう。

(ex) We must take good care of old people. 老人をよく世話しなければならない

上記の英文は、まず of の目的語である old people を主語にして受動態を作れます。

→ Old people must be taken good care of.

お年寄りは十分に(な)世話を受けなければならない

更に take の目的語である good care を主語にした受動態も作れるのです。

→ Good care must be taken of old people.

㊦ ここでも Care must be taken of old people. という受動態は普通ない。

このように、群動詞中の名詞を主語にした受動態を作れるといっても、(形容詞なしの裸の)名詞が主語になるのは普通ではない。

㊦ 「speak well of A:Aをほめる」のような、「自動詞+副詞+前置詞」型の群動詞が受動態になる場合、副詞は be動詞と過去分詞の間に置くのが普通。ただこれは少々マニアックなので、暗記は不要。

(ex) He spoke ill of his classroom teacher.

彼は担任の先生の悪口を言った

→ His classroom teacher was ill spoken of by him.

レクチャー4

知覚動詞・使役動詞の受動態。

(1)知覚動詞が作るSVOOCの受動態。

知覚動詞が作るSVOOCのCが動詞の原形だった場合、これが受動態になると、動詞の原形だったCはto不定詞に変化します。

知覚動詞+O+do[原形]～ ⇨ O+be+知覚動詞の過去分詞+to do[原形]～
C (S) C

(ex) I saw him enter the room. 私は彼がその部屋に入るのを見た

→ He was seen to enter the room.

彼はその部屋に入るのを(私に)見られた

(2)使役動詞の make が作るSVOCの受動態。

使役動詞の make (「Oに(強制的に)～させる」)の場合も知覚動詞と同様、
能動態時に動詞の原形だったCが受動態になると、to不定詞に変化します。

make+O+do[原形]~ ⇨ O+be made+to do[原形]~
C (S) C

(ex) My mother made me wash the dishes.

母は私に皿を洗わせた

→ I was made to wash the dishes by my mother.

私は(母により)皿を洗わされた

ちなみに、使役動詞の let (「Oに(許可して)～させる」) を受動態にする
場合、be allowed to do[原形]~ (「～することを許される」) を用います。

let+O+do[原形]~ ⇨ O+be allowed+to do[原形]~
C (S) C

(ex) My parents let me travel America by myself.

両親は私が一人でアメリカ旅行するのを許可した

→ I was allowed to travel America by myself by my parents.

私は両親から一人でアメリカ旅行をすることを許された

レクチャー5

進行形の受動態。

「～している（最中だ）」という進行形(be動詞+doing～)と、「～される」という受動態(be動詞+p.p.～)がドッキングした「進行形の受動態」は、意味的には「～されている（最中だ）」ということになり、形としては「be動詞+being+p.p.～」で表します。

進行形「～している（最中だ）」 + 受動態「～される」

be動詞+doing～

be動詞+p.p.～

↓

進行形の受動態 「～されている（最中だ）」

be動詞+being p.p.～

(ex) Now the bridge **is being repaired.**

現在その橋は修理されている最中である(修理中である)

レクチャー6

その他の受動態を用いた慣用表現。

(1)A(製品) be made of B(材料):AはBでできている

※できた製品をみて元の形がわかる場合に of を用います。

(ex) This desk **is made of wood.** この机は木でできている

(2)A(製品) be made from B(原料):AはBでできている

※加工をされていて、できた製品から元の形が(見ただけでは)わからない場合に from を用います。

(ex) Sake **is made from rice.** 酒は米でできている

(3)A(原材料) be made into B(製品):AはBになる

※intoを「→」つまり、左から右に向かう矢印と考えるといいでしょう。ちなみに of や from は「←」と考えるといいでしょう。

(ex) The strawberries were made into jam. そのイチゴはジャムになった

(4)A(意見など) be based on B(事など):AはBに基づいている

(ex) His opinion is based upon false facts.

彼の意見は誤った事実に基づいている

(5)be opposed to A:Aには反対だ

(ex) We are opposed to the plan in terms of funds.

我々は資金の点で、その計画に反対である

(6)be supposed to do[彫]~:

①~すると思われている

(ex) He is supposed to be guilty. 彼は有罪だと思われている

②~することになっている、するはずだ、~しなければならない

(ex) You are supposed to come at 7 o'clock.

君は7時に来ることになっている → 7時に来て下さい

I am supposed to leave now. 私はもう出発しなければなりません

Everybody is supposed to observe traffic regulations.

誰もが交通規則を守らなければならない

③[否定文で]~してはいけないことになっている

(ex) You are not supposed to smoke in this room.

この部屋では禁煙になっている

(7)be scheduled to do[彫]~:~する予定だ

=be slated to do[彫]~

(ex) We are scheduled to stay here for a week.

我々は当地に1週間滞在する予定です

レクチャー7

get [become]+p.p.~ の受動態。

be動詞の代わりにget[become]を用いると、「状態」ではなく「動作」や「変化」を意味するようになります。

(ex) I was accustomed to getting up early.

私は早起きをすることに慣れていた [状態]

I got accustomed to getting up early.

私は早起きをすることに慣れた [動作・変化]

レクチャー8

使役動詞の have[get] を用いた受動表現。

使役動詞の have[get] には、以下のような受身を表す表現があります。

have[get]+O+p.p.:Oを~される(してもらう)

たとえば「私は財布を盗まれた」という場合、この have[get] を用いて、以下のように表現できます。

(ex) I had[got] my wallet stolen.

もちろん上例の英文は、rob や steal (の受動態)を用いても表現できます。

① rob A(人) of B(物) :AからBを奪う

→ I was robbed of my wallet.

② steal A(物) from B(人):BからAを盗む

→ My wallet was stolen from me.

It is said[thought, believed, reported...] that S+V~ 型の受動態。

「It is said that S+V~:S~だと言われている、Sは~だそうだ」という、仮主語の it を用いた受動態があります。said の部分に thought が入れば「思われている」、believe が入れば「信じられている」、reported が入れば「報じられている」となります。

(ex) It is said that he is the richest person in Japan.

彼は日本で一番の金持ちだと言われている

特に It is said that S+V~ に関しては、(一般の人を表す)they[people] を用いて、They[People] say that S+V~ という形で書き換えることができます。

→ They[People] say that he is the richest person in Japan.

彼は日本で一番の金持ちだといわれている

更に It is said that S+V~型の構文は、that節内のSを文の主語にして

S is said[thought, believed, reported...] to V[原形]~.

という構文で書き換えることができます。例をいくつか挙げてみましょう。

(ex) It is said that he is the richest person in Japan.

彼は日本で一番の金持ちだといわれている

→ He is said to be the richest person in Japan.

It was thought that this was the most mysterious problem in history.

これは歴史上で最も謎に満ちた問題だと思われていた

→ This was thought to be the most mysterious problem in history.

It is reported that a big earthquake occurred in the area last month.

大きな地震が先月その地域起こったと報じられている

→ A big earthquake is reported to have occurred in the area last month.

受動態と時制のまとめ。

- | | | |
|--------------|--------------------------|--------------|
| (1)現在完了の受動態 | ◇ have[has]+been+p.p.～ | Ⓢp.p. = 過去分詞 |
| (2)過去完了の受動態 | ◇ had+been+p.p.～ | |
| (3)未来完了の受動態 | ◇ will+have+been+p.p.～ | |
| (4)現在進行形の受動態 | ◇ am[are/is]+being+p.p.～ | |
| (5)過去進行形の受動態 | ◇ was[were]+being+p.p.～ | |
| (6)未来進行形の受動態 | ◇ will+be+being+p.p.～ | |